
演技と料理と大失恋

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

演技と料理と大失恋

【Nコード】

N2977B

【作者名】

鷹嶺綺羅

【あらすじ】

水瀬悠理は男の子です。でも、外見は女の子だから、知らないところなることもあるわけで……。 「悠理ちゃんの災難」の前を飾る大災難話です！なお、時間設定等、あくまでいい加減です。だからあくまで超アナザーストーリー扱い。シーズの正史としては扱われないことを予めご了承下さい。念のため。

宝条君の一目惚れ（前書き）

楽天ブログ「美奈子ちゃんの憂鬱」公表済み旧題「宝条君の失恋」を再構成したものです。

なお、時間設定等、あくまでいい加減です。

だから、あくまで超アナザーストーリー扱い。

シーズの正史としては扱われないことを予めご了承下さい。念のため。

宝条君の一目惚れ

宝条瞬。

大物俳優の息子で、自身も二枚目俳優として大活躍している、芸能界のサラブレッド。

女子中高生を中心に大人気。

出演するドラマの平均視聴率25%。ドラマ・映画に引っ張りだこの天性の俳優。

特定の彼女なし（不確定情報・ただし、自称「彼女」多数）

●桜井美奈子の日記より

お昼。

「ねえ、ルシフェルさん」

「何？」

お弁当箱を広げるのを止めて、ルシフェルさんが私を見た。

「水瀬君、午前の体育、見学だったって聞いたけど、何かあったの？」

「あつ、そうか。桜井さんは知らなかったんだっけ」

「？」

「水瀬君、今、停滞期なのよ」

「停滞期？」

「簡単に言うとな？騎士の力が出せないのよ。危ないから、騎士としての一切のことをさせるわけにはいかないの」

「そんなこと、あるんだ」

はじめて知った。

「騎士の能力を体が具体化出来ない現象。人によるけど、1年から数年に一回くらいで発生するわ」

「ルシフェルさんも？」

「私は一年戦争前に最後のが終わっているけど、今回はなにしろ水瀬君だから、危なくて……」

「？」

「綾乃ちゃん絡みで恨み買いまくっているから、ここぞつてわけで、周りからどんな扱いをうけるかわかんないでしょう？だから、表向きは体調不良くらいになっているのね」

「でも、水瀬君、魔法騎士だから」

「魔法も騎士の力も出せないのよ。今の水瀬君」

「え？」

「まあ、準騎士位のこととは出来るけど……」

この後、用具室から借りてきたチェーンソー片手に未亜を探して校内中をかけまわった。

ルシフェルさんが霊刃片手に手を貸してくれたのも、私にすれば当然だ。

あのバカが、校内放送で私達の会話を全校中に流してくれたおかげで、水瀬君……正しくは、水瀬君を襲った連中が、とんでもない目にあったから。

丁度、トイレに行っていた水瀬君は、瀬戸さんの熱狂的ファンである男子生徒5人に突然襲われ、返り討ちにした。

5人全員が、空手部に所属しているとはいえ、普通科の一般生徒だ。

訳もわからずたたき伏せざるを得なかった水瀬君こそいい災難。

放課後開かれた緊急の職員会議でも、5人がかりで襲った生徒達に非難が集中。校長から罵声に近い叱責を受けたのは、「空手部の綱紀は学園随一」と豪語していた生活指導の鬼瓦先生。

先生のメンツは丸つぶれになったわけ……。

この日からしばらく水瀬君、登校しなくなった。

● 1日目 宝条瞬の日記より

映画の撮影でこの山の中に来たのが昨日。

ハードなスケジュールのおかげで、正直、かなりキツイ。

予定では残り4日、この山の中で過ごすことになる。

マネージャーの世良さんは、「気楽にいけばいいわよ」というが、監督は時代劇の第一人者の、あの池沢監督。こと、チャンバラ物にかけては日本、いや、世界随一の巨匠だ。

それだけに、厳しい。

わかっていたつもりだけど、ここまでとは思わなかった。

殺陣指導の新村さんの指導通りにやっているつもりでも、監督はどうにも気に入らないらしい。

昨日、テイク40までやって遂にOKがでなかった。

午前中、天候の問題から撮影は中止。

一息つける。

「はい。お疲れ様」

ベンチに腰を下ろした僕に、後ろから缶ジュースを差し出してくれたのは、同じ年頃の、銀色の髪をボブカットにした小柄な女の子。あどけなさの残るがものの、かなり整った顔立ちに大きな目が印象的だ。

「あ、ありがとう」

女性には親切にするのが僕の礼儀だ。

他の男達からは「キザ」だといわれるけど、そんなことはないはずだ。

僕はあくまで俳優として、理想を追いかけただけだ。

文句があるなら、「キザ」がふさわしくなってみればいい。

「ね？なんで何度もやり直していたの？」

親しげに話してくるけど、この子、僕のファンというわけでもないみたいだ。

「つていうか、君、誰？」

「あ、ごめんなさい。僕、明光学園から護衛で来ました。水瀬です」

「明光から？」

「うん。はい、連絡」

受け取った書類には、確かに明光学園校長のサインと共に、この子が騎士養成コース生徒として僕の護衛の任務にあてることが書かれていた。

「あ、騎士なんだ」

「今は、役立たずですけど」

バツが悪そうな微笑みが、なんだか僕の心を和らげてくれた。

「ま、いいか。でも、ここで護衛なんて意味ないと思うけど？」

「身の回りの世話でもいいっていわれました」

午後、天候回復。

テイク１０で監督がキれた。

散々罵声を浴びされ、内心で泣きたくなった。

父さんがどれほどすばらしかったか。それに比べて――。

延々と続く罵声を凌いだあと、力無くベンチに横になる。

他の撮影は順調らしい。

スタート！

はい！OK！

悔しい。

涙が出てこないのが幸いだ。

コンッ

「!？」

誰かに額を叩かれた。

起きあがると、あの子が僕を見ていた。
手には竹光が握られている。

「剣、教えてあげようか？」

最初からダメモトだった。
気分転換くらいにはなるだろう。程度だった。

「もう一度、さっきの演技してみてください」

「あ、ああ」

僕は刀を構え、居並ぶ二人を近づきざまに斬り捨てる演技をした。
指導通りのはずだ。
だけど……。

「うーん」

悠理と名乗る、この子は、困ったような顔で言った。

「演技の時、背中に棒が当たっていた？」

「え？」

僕の背中には、悠理によって棒がくくりつけられている。

二枚目俳優としては遠慮したい格好だが、「これも芸のため」と
悠理に断言され、黙ってつけている。

でも、

「い、いや……」

「やってみるから、背中の棒に注意していて」

「棒？」

「あのね？多分、こうしろって言われたんじゃない？」
悠理が、僕と同じ演技をする。

剣は滑らかに、芸術的な曲線を描いて空を斬る。
スクリーンでは、これで二人が斬られることになるのだけど、確かに、悠理の演技は、「斬って」いる。

だけど、僕の演技とどこが違うのかわからない。
違いと言えば――

「気づいた？」

「背中の棒が、ずっと背中についていた」

「正解」

悠理の微笑に、顔が赤くなっただのがわかる。

確にかわいいけど、可愛い娘ならゴマンと見ている僕が、ここまでするはずがないのに……。

悠理は続けた。

「宝条君、背中が丸まっているの。だから、棒が背中につかない。どういふことかといえば、剣を振るっていないから」

「振るっている」

「違うよ。振り回されているの。宝条君、剣を振るうのをどこかで怖がっている。だからそうなるの。相手を殺しにいつているはずなのに、殺すことを怖がっている。――少なくとも、見える人にはそう見えちゃう」
なるほど。

悠理が「斬っている」ように見えたのは、背筋が通っているからか。

なら、やってみよう。

「じゃ、こうすればいいのかい？」

僕は、背中の棒を意識しながら、一連の演技をした。

「もう少し。足運びが」

近くの切り株に座った悠理が指示を出してくれる。

「踏み込みと振り下ろすタイミングがずれてるよ。呼吸を調整して。すーはーすーはー……そう、そんな感じ」

気が付くと、2時間近い練習になっていた。

汗だくになっても気にもならない。

棒を外していたことすら、忘れていた。

背中に棒がある感じをすぐにイメージできる。

つまり、格段に上手くなったことを、自分でも自覚できる。

「剣は腕で振るっちゃダメ。腰で振るイメージでね」

「袈裟切りの時は特に気をつけて。刃筋を通さないと、絵にならないよ」

悠理の注文が、細かいものの当を得ているおかげだ。

「じゃ、これで最後ね」

悠理の声に、僕は目を閉じた。

僕は愛する恋人のために剣を振るう若い旗本。

目の前には、恋人を奪おうとする老中の手先2人が立つ。

「田村の手の者か」

二人は答えない。

答えの代わりに、彼らは刀を構え直す。

「死に急いでどうする？」

問いに答えず、正眼の構えから振りかぶった手近な一人が

「やあっ！」

気合いの声と共に僕目がけて打ち込んでくる。

僕は、放たれた弓のように鋭く動き、体を入れ替えざまの一撃でこいつを倒して、滑らかな足取りでひるむもう一人に近づく。

「死に急ぐな」

その僕の警告に答えることなく、

「うおおっ……！」

こいつは刀を突き出してくる。

「馬鹿が！」

わずかに横に動き、袈裟切りで始末する。

「死んで何の意味がある！侍といえど、生きてこそ価値があるものを！」

吐き捨てるように言いつつ、血振るいの後、刀を納め、歩き始める。

……

これが一連の演技だ。

これを50回やりなおして、監督から罵声を受け続けた。
本当に、情けなくなる。

「よし！」

野太い声で、僕は現実に戻った。
見ると、監督がいた。

「瞬！」

「は、はい……」

「とつととこつち来て、もう一回やってみろ！」

監督は、それだけ言つと、背を向けて現場へ戻っていった。
僕は慌ててその後ろに続く。

「またか」という顔で斬られ役の二人が位置についた。

僕はメイクや衣装直しがまだ終わっていない。

本当に申し訳なく思う。

「瞬！」

「は、はい！」

「これでしくじつたら、降板だぞ！」

心臓が止まるかと思った。

役者として不適切なための降板。

それは役者生命の終わりと同じ意味だ。
息が止まりそうになる。

その時、

ポンッ

背中を押された。

振り返ったら、悠理がいた。

「大丈夫だよ」

「あ、ああ」

「笑ってごらん？」

「え？」

「ステージで歌うのと一緒に。緊張した顔で歌っても、お客さんは喜ばない。それに」

「？」

「なんだかんだ言っても、殺しが好きな侍、なんでしょう？ ばーんって、殺してきちゃいなよ」

そのにつこりとした微笑みが、僕に決意させた。

「アクション！」

カメラが回る。

関係ない。

僕は侍だ。殺しが大好きな。

目の前には殺し甲斐ののなさそうな奴らが二人――。

「田村の手の者か」

「はいOK！」

気が付くと、撮影が終わっていた。

「よくやった、瞬！」

監督がディレクターチェアーから飛び降りるなり、僕を抱きしめた。

「さすがに俺が見込んだ逸材だ！ そうだ！ そうして欲しかったん

だよ！」

男に抱きしめられる趣味はないけど、この時の抱擁を、僕は一生忘れないだろう。

みんな拍手してくれている。

50回も付き合ってくれた斬られ役の二人まで、だ。

「ありがとうございます！」

心からそう言えた。

人への感謝の言葉。

上辺ではなく、心の底からそう言えたのは、何年ぶりだろう。

僕は、それが言えた。

痛感したのは一つ。

役者を目指して、よかったということだ。

● 2日目 宝条瞬の日記より

「あ、おはようございました」

早朝の口ケを終え、民宿へ戻った僕達を出迎えたのは、その声と、何とも言えない美味しそうな匂いだった。

テーブルの上には、お櫃と美味しそうな食事が並んでいる。

調理場には、エプロン姿の悠理がいた。

「お、おはよう」

「悠理ちゃん、悪いな。料理まで頼んどまって」

監督達が適当な席に着く。

「いえ。あ、昨日、お酒飲んだ人がいるでしょう？ 肝臓にいいか

ら、浅利のおみそ汁です。パン派の人にはコーンポタージュ。どちらもおかわりありますからね」

どっちにするか迷ったが、ここは和食にした。

ご飯にみそ汁に漬物、魚に納豆。

大皿には野菜と豚肉の炒め物や煮付けが載っている。

「じゃ、いただきます」

監督が箸をつける。

心配だ。

監督は味にはかなりうるさいことで知られる、いわば美食家だ。たかが女高生の料理に、監督がなんというか……。

スタッフ全員が監督に注目する。

「う」

料理を口に運んだ監督が動きを止めた。

口の中に入った物が信じられないという顔だ。

「あ、あの……監督？」

「……」

監督はゆっくりと口を動かし、飲み込んだ。

あとは無言。

下っ端は、監督の異変に気づき、心配そうにみつめるだけ。

箸をつけることすらしない。

「おい嬢ちゃん！」

監督が大声で悠理を呼ぶ。

「はい？」

調理場からお茶の入ったやかんを持ってきた悠理が監督の所へ来た。

「これ、嬢ちゃんが作ったのか？」

「う、うん。……おいしくないですか？」

「本当に、嬢ちゃんが作ったんだな？」

「う、うん」

しばらく悠理を凝視していた監督は、悠理に訊ねた。

「昼、どうする？」

「暑くなってきたから、さっぱり冷たい物がいいかって」
「よし」

監督は大きく頷いた後、箸を持ち直した。

「全撮影期間、お前を雇う。金に糸目はつけないから安心しろ。
瞬と同じ、いや、それ以上の額を払ってやっていい」

「え？」（×僕&悠理）

「はい？」（×全スタッフ）

「いいから喰ってみろ！これがまずければ、精神病院へ行け！」
後は遮二無二、文字通りメシを「喰らう」監督。

「こんなすごい食事、朝から食べていいのだろうか」
それが僕の感想。
とにかくすごい。

これでもかとはかりに素材の旨味が引き出されている。
特に煮物は絶品だ。

イワナからだしをとったと悠理はいうけど、そのだしと野菜本来の旨味が言いようのないうまさとなって、口の中でとろけるようだった。

「うめーっ！」

スタッフ全員、このセリフの連発。

25人分とはいえ、あれだけあった料理はものの10分もしないうちにきれいに空になった。

残飯一つ、本当に何も残らなかった。

食後、全員でお茶を飲みながら、まったりとした時間を過ごす。

いわば、美女と戯れたあとの余韻のようなものが、全員を虜にしていた。

「お粗末様でした」

食器を片づけながらそういう悠理。

「いや、嬢ちゃん！昼飯は期待してるぞ！」

料理人に罵声を浴びせるほどの美食家の監督が大声で言うからには、監督も大満足したようだ。

「で、悠理君はこの後どうするんだ？」

「ここ片づけて、皆さんの寝具を干して、シーツ洗って」
指折り数えながら言う悠理。

「お昼作ったら、夕飯の準備、かな」

「頼むね」

「うん。宝条君も、撮影、頑張ってね」

しばらくした後、監督が言った。

「おい、瞬」

「はい？」

「いろいろオンナと浮き名流しているのは知っている」

「は、はあ……」

「それも芸のウチだな」

「……」

「お前、今時、あれだけ出来るオンナとつきあったことあるか？」
女の子との交際は、芸を磨く。

そう薦められて、何人もの女の子と交際はしたことがある。
だけど、正直、女の子の手料理を食べたのは初めてだった。

「いえ」

「そうだろう」

監督は大きく頷いて言った。

「今時、貴重だぞ。アレは」

孫にはああいうのか欲しかった。とばやく監督、何が言いたいんだろう。

「あの……」

「気付よ」

「はあ？」

「さ、上手いメシ喰ったからには、いいかテメエ等！気張っていけ！」

監督は怒鳴りながら席を立ち、僕はその後続いた。

恋する資格って？（前書き）

第一話に比べると長くなります。予めご了承くださいね？

恋する資格って？

2日目 宝条瞬の日記より

昨日までがウソのように撮影は順調。

セリフ一つ間違えず、自分でも驚くほどのペースだ。
むしろ、ペースが速すぎて疲れてしまうくらい。

日中の暑さもあって、喉がからからだ。

「よしっ！メシにしよう」

監督の一言に、正直救われた。

民宿に戻る。

「おかえりなさい」

悠理が民宿の庭で出迎えてくれた。

エプロン姿が、なんだかかわいく思えてならない。

「嬢ちゃん、メシか！？」

血走ってすらいる監督の目の前には、水を張った大きな木桶にきれいに素麺が盛りつけられている。

氷と素麺の白さが涼を感じさせ、見ているだけで食欲をそそられる。

「よっしゃ！喰うぞ！」

一体、この娘は何者だろう。

本当に謎だ。

どこか一流の料理人が変装している？
そんなバカな。

だけど、そうでなければ、ただの女子高生が、どうすればここまでの味が出せるんだ？

はつきりいつて、東京の一流レストランのシェフだってここまでの味は出せないだろうことは、子供の頃から名店を食べ歩いた僕にはわかる。

というか、出せるはずがない。

「ううおおおおっ！うめええええっ！！」

「マジ！？素麺つて、こんなに美味かったか！？」

「嬢ちゃん！追加急いでくれ！」

監督達は、先を争って食べまくる。

その中には僕もいた。

つゆがとにかく絶妙。

甘さといい、塩加減といい、コクといい、すべてが芸術品といえる。

素麺の喉越しを殺すことなく、むしろそのまろやかさが絶妙なハ―モニ―となって喉を喜ばせてくれる。

「薬味もありますよお」

テーブルには、悠理によってきれいに盛りつけられた錦糸卵や椎茸の煮染めを刻んだものが並べられた。

これも絶妙。

何もかもが、絶品過ぎるほどの絶品だ。

いや、これは、これこそが芸術だ。

でも……。

僕は箸を置いて台所に向かった。

心配だったからだ。

悠理は、みんなの世話に追われ、何も口にしていない。

みんなが楽しいひとときを過ごしているのに、悠理はそこにいない。

一人で苦勞している。

それは、おかしいと思った。

「手伝うよ」

「え？ああ、大丈夫だよ」

悠理は額に汗を浮かべながら、大きな鍋から素麺をあげると、手慣れた手つきでしめた。

「だけど、何も食べていないだろう？」

「後で食べてるよ。それに」

素麺を手早く盛りつける悠理は言った。

「これが僕の仕事だもん」

「……じゃ、追加を持って行くのは僕の仕事だ」

僕はだまって素麺を受け取った。

「年齢的には、僕も下っ端だからね」

「……ありがとう」

なんで、この子、ただ微笑むだけでこんなに可愛く思えるんだろう。

僕は、顔が赤くなるのを押さえられなかった。

「どしたあ？瞬、顔が赤いぞ？」

僕から素麺を受け取った監督に気づかれた。

「え？そ、そうですか？」

「しかもにやけてる」

軽く顔を叩いてみる。

「お前、嬢ちゃんに何かしたんじゃないだろうな」

「何って」

「ナニだよ、ナニ！」

「な、何のことですか？」

「瞬！」

監督は、ドスの効いた声で言った。

「は、はい！」

「他のチャラチャラしたオンナのつもりで嬢ちゃんに手を出したら、二度と芸能界で仕事とれなくてやるからそう思え！」

周囲からは冷やかしの声と、そうだそうだ。というヤジが飛ぶ。

「ち、ちよつと待って下さい！ぼ、僕はそんな——」

「あんな出来た娘にチョツカイ出すんじゃないやねえぞ！？」

監督は、真顔でそう怒鳴った。

「今のお前じゃ、嬢ちゃんが不幸になるからな！」

午後の撮影。

二度あることは三度あるとはいうけど、またもや難関が待ちかまえていた。

演技にどうしても納得が出来ない。

役者ならわかってもらえるだろうけど、何かがひっかかってふつきれない。

監督の表情も険しくなってくる。

ちよつと休憩。

「お疲れ様でえす！」

その声のした方を見ると、草陰を背負子だけが歩いてくる。

「なんだ！？」

「妖怪か！？」

スタッフもびっくり。

「石でも投げてみようか？」

誰かが石を構えたのをあわてて止める。

草陰からひよっこり顔を出したのは、巨大な背負子を背負った悠理だった。

「お茶、持ってきましたあ」

「まったく、嬢ちゃんも災難っちゃあ、災難だなあ」

スタッフの一人が、麦茶をもらいながら気の毒そうに言った。
本当にそうだ。

悠理が料理や旅館の掃除までやっている理由。

それは、昨日の夜、スタッフ数名と旅館のおばさん達が街まで飲みに行つて事故に遭い、全員が入院したからだ。

旅館には、主である老婆がいたものの、肝心の運用に必要な人手はゼロ。

その老婆も、深夜にリュウマチが悪化して緊急入院。

旅館を好きに使つていい。といわれたものの、これには困った。

頼むべき女性もメイクなどで数名いるものの、炊事洗濯の能力がないことを、周囲はイヤという位熟知していたし。

撮影に響くと監督が激怒する中、

「料理と掃除くらいならできるよ？」

と申し出てくれたのが悠理だった。

「はい。宝条君、お茶」

「サンキユ」

セリフのせいで乾いた喉を麦茶で潤す。

「嬢ちゃん！ビールはないのか！？」

音響の湯本さんが冗談めいて言う。

この人、本当に酒好きで困る。

「仕事中ですよお？」

「ハッハッハア！ま、夜は出るよな！？」

「うーん。誰か買い出しにつきあつて頂ければ」

「後で手配しよう」と監督。

「お願いします」

「そのかわり、夕飯も期待してるぜ？」

「はい」

気が付くと、僕は悠理の一挙手一投足を眺めていた。

ただただ、この娘が気になって仕方ない。

この娘の、ちよつとした仕草や表情の変化に心が奪われている。

「で、宝条君、上手くいつてる？」

「え？あ、ああ、まあ」

情けない。

他の女の子だったら、どんなんでも上手くあしらえるだろうに。
なんでこの子にはそう出来ないんだろう。

これじゃ、役者失格だ。

「それがなあ、嬢ちゃん、聞いてくれや」

監督が悠理に気に入らない点を話し出した。

それは、的を射てはいても、やはり女の子に言つて欲しいものではない。

「ふうん……」

「つまり——」

コホンッ

悠理は喉のあたりを少しなでた後、動いた。

「お待ち下さい！」悠理が何かにすがりつく。思い詰めた、凄まじい形相。

「いま一度……いま、一度……」

悲哀に満ちあふれた声は、聞く者の心に痛みとなって伝わってくる。

「くだいな」立ち上がった悠理が演じるのは僕の相手役。まるで汚物を見るような目は、氷のよう。

「お主の負けじゃ！すなわち死んだんじゃ！なんじゃ、その無様な姿は！」

無情にも蹴られる悠理。

「沖田殿……」

哀願をたたえた眼差しは、絶望へと変わってゆく。

「失せろ」

「……」

すがりつく悠理の手は、力無く地に落ちる。

「負け犬らしく、どこへなりと行くがよいわ！」

——人は、あまりに悲しいことがあると、逆に泣けないという。まさに、悠理の、そして僕の役はそういう役。

放心状態に陥る悠理。

脇差しに気づくと、焦点の合わない目のまま、それを抜いて腹を切ろうとするが、その刃を見た途端、脇差しを落としてしまう。

手が震えて、脇差しがつかめない。

悠理は、死ぬのを怖がっていた。

しかも、自分が死を怖がっていることを、悠理は驚いている。

震える手を、いや、自分を信じられないという顔で見つめる悠理は、声を上げて泣きじゃくりはじめた。

「——って、こういう感じ？」

何でもないって顔で、ひょいと顔を上げる悠理。

見ていたスタッフ全員が言葉を失った。

僕もだ。

何故かって？

簡単だ。

悠理の演技力だ。

完璧。

いや、完璧すぎる。

悠理は完璧すぎるまでに二役を演じきった。

手には何も握ってはいない。

でも、そこには間違いなく、脇差しがあつた。

蹴ったわけじゃない。蹴られたわけでもない。

でも、悠理は確かに蹴り、蹴られた。

それは、演技が完璧でないと出来る芸当ではない。

しかも、その声は、僕と、相手役の綿引さんの声と寸分変わるところがない。というか、綿引さん自身を、完全に演じきっていたんだ。

信じられない。

「うーん。あのね？理由は簡単だよ」

僕達の驚きに気づかないらしい悠理は、僕に言った。

「宝条君、そこまで追いつめられた経験、ないでしょう？」

「え？」

「つまり、経験がないから、絶望するって、どういふことかわかんないんだよ」

「……」

確かに、そうかもしれない。

死のうと思うくらい絶望するなんて経験はしたことがない。

「したくないことを、演じるのが役者さんだから、難しいかもしれないけど、でも」

悠理は微笑みながら言ってくれた。

「宝条君なら出来るよ！」

ドッキン！

心臓が高鳴った。

「あ、う、うん……」

「？……あ」

あたりをキョロキョロした悠理が、何かを思い出したように、急にしょぼんとしてしまった。

「ごめんなさい」

そう言つて、急に頭を下げる悠理。

「ごめんなさい。皆さんの世界に土足で踏み込むようなことしました。反省します」

そういつて、悠理は旅館へと戻っていった。
とぼとぼ歩いていく悠理の背中には痛々しい。

その後ろ姿を見送る僕は終始無言。

というか、最後まで言葉が出てこなかった。

悠理は、単に状況を確認して、僕を励ましたかっただけ。

そして、僕は、いや、僕達は、悠理の演技力に度肝を抜かれただけ。

誰も、非難なんかしていない。

むしろ――。

「瞬！」

監督が真っ赤になりながら怒鳴った。

その体はワナワナと震えている。

「嬢ちゃん、役者にしろ！」

「はあ！？」

「あれはお前以上の天賦の才がある！俺にはわかる！あれは金、いや、ダイヤの卵だ！」

「っーか、おい瞬」

綿引さんが僕の肩に手を置くと、ため息混じりに言った。

「お前、オナナの扱い、下手すぎるぞ」

やはり名優。貫禄が違うその言葉に、僕は驚いた。

「えっ……」

「嬢ちゃん、お前の機嫌損ねたと思って凹んでるんだよ。お前が男としてきちんとフォローしなかったせいだ。わかっているのか？」
つまり、僕は悠理を傷つけた。

そういう、ことだ。

僕は、それにどうしていいかわからない。

そして――

「はいOK！」

監督の号令が飛ぶ。

「瞬！そうだ！それが絶望するっていうんだ！」

演技の最中、僕がすがりついていた体は、確かに綿引さんだった。
でも、その顔は、悠理だった……。

そうか……絶望するって、こういうことなんだ。

● 2日目 宝条瞬の日記より

夕食

悠理が近くの川で捕ってきたというイワナ料理がメイン。

川魚がこんなに美味しかったとは知らなかった。

「嬢ちゃんマジック」

誰が言い出したか忘れたけど（確か、撮影の坂本さんだけ）、
本当に魔法のような美味。

撮影は順調。

食事も美味い。

酒も出て、みんな大騒ぎだ。

でも……。

悠理は、昼までとうってかわって、あまり台所から出ようとしな
い。

表情も、どこか沈みがちだ。

「……」

気になって仕方ない。

悠理が落ち込んでいる責任は、僕にある。

僕の演技が完璧だったら、綿引さんの言つとおり、あの時の僕の
フォーローがしっかりしていれば、悠理は落ち込まずに済んだ。

だから――。

「悠理」

僕は台所へ入った。

「あつ……」

気まずそうに目を伏せる悠理。

「ごめん」

僕はそついつて頭を下げた。

「え？」

「僕のせいで迷惑かけたから、だから、ごめん」

「ち、違うよ!」

悠理は慌てていった。

「僕が余計なコトしたからだよ!謝るのは僕のほう!」

「だけど――」

「僕、少しだけ嬉しかったのかもしれない」

悠理は言った。

「あのね?僕の育ったところって、テレビがほとんど受信できな
かったし、映画館もなかった。だから、役者さん達を見る機会って、
本当になかった」

「……」

「でね？テレビで一話見られても、続きがどうなるかわかんない。見ることが出来ない方が多いから。だから、「きつところかな」って、自分で演技のマネゴトしてたんだ。で、今日の話聞いて、なんだか自分がしていたことを、みんながしてるような、そんな気になっちゃって……」

悠理はうつむいたまま、言った。

「僕は一人で遊んでいただけ。みんなは仕事。その辺を、忘れちゃっていたんだ」

「でも、上手かったよ」

「下手だよ……」

「しかも、僕に絶望ってことを実感させてくれた」

「え？」

「い、いや、なんでもない。と、とにかく、みんな、悠理のしたことを悪いことだとは思っていないよ。大丈夫。みんな、君には感謝しているよ」

「そうかな……」

「信じられない？」

「うん……」

「じゃあ、こうしよう」

「？」

「今から二人でみんなの所へ行く。で、君が怒られたら、僕は君の言うことをなんでも聞く。これでどう？」

「怒られなかったら？」

「……デートしてあげよう」

ぷつ。と笑う悠理が悪戯っぽく笑いながら言った。

「や・だ」

絶望第二弾を味わった後、僕と悠理は食器の片づけのため、みんなの所へ行った。

「おう嬢ちゃん！」

酒が回っているらしい監督が悠理に声をかけてきた。

「は、はい」

「女優の道に進め！次の作品の主役は任せた！」

「は？あ、あの……」

悠理の手を引いてグテングテンの監督から遠ざける。

「大丈夫？」

「酔うとあの人、いつもああだから」

「瞬！次もお前が主役だ！なんならキスシーンつけてやる！」

「やります！」

言下にいきってしまった。

我ながら現金なもんだ。

「おーし！」

「あ、あの……」

困った顔の悠理の顔をまともに見られない。

「あ、ああ、ギャグだよギャグ」

本当、こういう演技だけは上手くなる気がする……。

手が荒れると困る。

という理由で、悠理に断られた僕は食器洗いは出来なかった。

風呂に入って一息つける。

後は寝るだけだ。

「あ」

「おっと」

廊下の角で悠理とぶつかりそうになった。

悠理もどこか別な風呂に入ったらしい。

ブカブカのシャツ姿だ。

子供っぽい悠理でも、こういう時、つまり、湯上がり姿は、なん

だか色っぽくすら見える。

「お風呂あがり？」

「あ、ああ。君も？」

「うん。露天風呂」

「あつ、そつちに行けば良かった」

「気持ちよかったよぉ？……あれ？」

悠理の視線が下に向かう。

「宝条君、浴衣がほつれている」

「え？」

見ると、膝のあたりがすこしだけほつれていた。

「待つて。直すから」

悠理は針と糸を取りだすと、僕の前にしゃがんだ。

「あ、そういうの、持つてるんだ」

「たしなみ、だよ？」

『お前、今時、あれだけ出来るオンナとつきあったことあるか？』

不意に、監督の言葉が思い出された。

はつきり言う。

ない。

ここまで気づく女の子も、まして針と糸を持ち歩く女の子も、つ

きあったことがない。

手料理も食べた。

布団の世話まで、全部悠理がしたと聞いている。

あの演技力のこともある。

この子は、本当にすごい娘だ。

『今時、貴重だぞ。アレは』

監督の言葉を、僕は実感している。

この娘に比べ、僕なんて、どうなんだろうか……。

ちらりと悠理を見て、僕は心臓が止まった。

この体勢だと、悠理の胸元が丸見えだった。
平べったい胸の先っぽのピンク色は……。

ゴクッ

生唾を飲んだ音がやたらと大きく響いた気がした。

抱きしめたい。

抱きしめて、あんなこととか、こんなこととか……。

その手の経験はあるし、この年では豊富な方だと思っている。

でも、

『あんな出来た娘にチョツカイ出すんじゃないぞ!?!』

監督のあの時の言葉が楔となって僕を襲ってきたおかげで、僕はここで失態を犯さずに済んだ。

それだけは幸いだった。

『今のお前じゃ、嬢ちゃんが不幸になるからな!』

あれは、どういう意味なんだろう。

僕が、ふさわしくない。ということか？

何故？

ただ、終始、視線は悠理の胸元に釘付け。

見てはいけない。と思いはしても、目が拒否している。

頼む。息子よ。おとなしくしていてくれ！

「？」

不思議そうな顔をした悠理が、ちらつと僕を見上げた後、不意に浴衣に顔を埋めた。

「!!」

僕はとつさに帯を押さえる振りをして股間を押さえた。

悠理が糸を歯で切っただけだ。

でも、この子がこの姿勢で顔を埋める。というシチュエーションは、正直、理性の糸をまとめてぶった切られるほど刺激的だった。

「終わったよ」

そういつて、針と糸をしまう悠理だが、

「どうしたの？」

「いつ、いや、なんでもない」

風呂道具で前を隠す僕。

情けない。

この娘の前で、僕は何一つ、格好いいところが見せられないままだ。

神様、二枚目俳優宝条瞬は、何枚目俳優に格下げになったんでし
ようか？

「とつ、とにかく、ありがとう」

「いえいえ」

クスクス笑う悠理と、しばらく並んで歩く。

とりとめもない話が続く。

「あつ、そうなんだ。綾乃君と同じクラスなんだ」

「うん。宝条君はC組だったよね？」

「ああ。でも、あんまり学校には行っていないからね」

「仕事、忙しいんだね」

「うん。学校でみんなと一緒に勉強、か」

窓越しに見上げると、満天の星空。

「楽しいよな」

「うん」

悠理も並んで星空を見あげる。

——だめだ。

夜空がスクリーンになって、さっきの光景が浮かんでしまう。

その後、しばらく悠理と話をした後、部屋へ戻った。

布団は、太陽の匂いがした。

心から安心できる匂い。

深く深呼吸して、心の中で悠理に感謝する。

——この匂いは、きっと悠理の匂いだ。

なんでそう思ったかわからない。

だけど、僕は悠理に抱きしめられているような気がして——。

● 3日目 宝条瞬の日記より

翌日のお昼。

「はいこれ」

食事時に悠理が手渡してくれたのは、風邪薬だった。

「？」

「ゴミ箱にティッシュがたくさんあったでしょ？風邪薬、早めに飲んでおいた方がいいよ？」

心配そうに言う悠理に、僕は笑って感謝した。

とてもいい。

悠理に抱きしめられるような気が高ぶりすぎて、翌日の太陽が黄色く見えたなんて……。

● 宝条瞬の日記より

撮影はすこぶる順調。

監督からは次の仕事もらえることは確定。

連日泊まり込みの撮影にもかかわらず、スタッフにも色は見られない。

やはり、美味しい食事のおかげだ。

今日の夕食は煮込みハンバーグ。肉汁の具合が絶品だった。

体調も良好。

精神的にも、ロケ開始当初のスランプがウソのようだ。

これもすべては悠理のおかげだ。

悠理が頑張って食事や身の回りの世話をしてくれるから。

何より――

「宝条君なら出来るよ！」

あの凶悪なまでの笑顔から繰り出される励ましの言葉。

あれが効いていることは疑いの余地がない。

監督は、全撮影期間中、食事当番として雇うとっているが、それは無理らしい。

予算とか学校の関係とか、いろいろある。

何より、悠理は芸能界とは無関係の人間だ。

明日でここでの撮影は終了する。

悠理も、ここからいなくなる。

監督は、意地でも悠理を女優にするつもりだし、何よりあの食事をもっと堪能したいみたいだ。

僕も、これで悠理とは学校でしか会えなくなる。

仕事に追われる僕がほとんど行くことの出来ない世界へ――。

日記を閉じた宝条は、意を決したように席を立つと、部屋を出た。

「おう、瞬、どうした？ 入れ」

宝条が向かった先、そこは監督の部屋だった。

「やるか？」

監督が差し出したのはビール。

「いただきます」

「未成年だろうが」

「勧めたのは監督です」

二人はしばし無言でビールを傾けた。

「お嬢ちゃんの件か？」

口を開いたのは監督だった。

「どうしても、教えてもらいたいことがあって」

「何だ？」

「監督、僕が彼女にふさわしくないって、そう言っていましたよね？ 気付よ、とも。あれは一体――」

「言葉通りさ」

「それがわからないから、ここに来たんです」

監督は、じつと宝条の顔を見ると、ため息まじりに言った。

「そうか。わからなかったか」

「……」

「おい、瞬」

「なんです」

「お前、自分であの嬢ちゃんにふさわしい男だとも思っているのか？」

「……」

「答えろよ」

「はい」

「……だからだよ」

監督は鼻で笑った後、言った。

「お前は嬢ちゃんにはふさわしくない」

「だから！」

「お前はまだ、自分が何者か、それすらわかっていない。二枚目俳優？ 名優の息子？ そんなものは周囲がつけただけの肩書きではない。七光りさ。他人の後光で成り立っている。それがお前だ」

「……」

宝条は、言葉が出なかった。

「お前は、自分がない。俳優なんて、みんなそうだ。しゃべるセリフも、存在も、すべて借り物だ。スクリーンに映る役者を、ただ役者としか見ないバカはいやしない」

「それでも、僕はやるべきことをやっています」

「当たり前だ。仕事だろうが」

「お話が見えません。それと悠理と、どう繋がるんですか？」

「お前、名優っていわゆる役者と、大根の違い、わかるか？」

「え？」

「セリフ回しとかじゃない。長年、何人も俳優を見てきた。いろんなヤツがいたよ。才能があるのに芽のでないまま消えていったヤツ。今のお前みたいに周囲の後光で泡みたいに消えていったヤツ」

監督は、ビールの缶を握りつぶした。

「その中に、お前のオヤジさんもいた」

「父さんが？」

「ああ。最初はただの優男の端役もいいところだ。ところが、不思議と存在感があった。スクリーンの端にいても、ついつい目がそっちにいく」

「どうして、ですか？」

「それに気づいたとき、俺は名優と大根の区別がわかったのさ」

「それは？」

「己を持っているかどうか、さ」

「己？」

「そうだ。上辺の存在じゃない。心の底から、己という存在を持ち続けているんだ。何かになるためには、まず、己がなければならん。己を持つヤツは、絶対に何をしてもし上手いく。——嬢ちゃんみたいに」

「悠理が？」

「そう。嬢ちゃんは、お前なんか比較にならないほどしっかりとした己を持っている。それはフアンの前でお前が見せるキザったらしい紙切れみたいなもんじゃない。もっとこう、深い、深くて大きいモンだ。人間性、つーか、器みたいなもんかもしれないと思う。俺は学がないから、上手く表現はできないがな」

「己という土台があるから、そこで悠理はどうとでも動ける。——そういうことですか？」

「そうだ。演技する時、自分を空っぽにするなんていうが、それはウソだ。己と演ずべき存在が持つべき自己をリンクさせてこそ、みたる？嬢ちゃんのあの迫真の演技」

「は、はい」

「すっかりした己を持たないヤツは、勝手に空想した偽りの想像に振り回されて大した演技が出来ない。己を持つ名優はそんなマネしない。演技の深みつてのは、その辺にあるんだろうなあ」

「僕は、己をもっていない、ということですか？」

「ああ。オンナと浮き名流しても、何してても、お前は上辺だけの安いチンピラだ。今のお前じゃ、嬢ちゃんまでダメになる。だから、俺は嬢ちゃんとお前の関係は認めない」

「まるで、僕が悠理にとって害毒っていいみたいですね」
宝条は拳を握りしめながら言った。

「そういった」

「！」

とつさに殴りかからずにいるのに、宝条は自制心を総動員するハメになった。

「瞬、お前はな？親父さんのようになるために、もう一度、心を磨いた方がいいぞ？」

「心？」

「そうだ。強い自己を持て。何者にも汚されることのない、強い自己をだ。そうすれば、お前ははじめて嬢ちゃんと似合いになれる」
それまでに、嬢ちゃんがオンナとしてどこまで成長するかもあるか。

監督は、そう言つて少し笑つた。

そうか。

宝条は何とか納得することができた。

才能じゃない。

全ての根元は自己なんだ。と。

「それに気付け、といたかつたんですね？」

「ん？ああ、それはハズレだ」

「？」

「俳優やって、最も長持ちする女房はな。ただの美人じゃない

んだ」

「？悠理は——」

「顔じゃねえんだよ。嬢ちゃんみたいな気だての良さ。亭主をおつたてる配慮、なにより家事が出来て、家に帰れば笑顔で上手い料理を並べてくれる才能と心があることさ。これが出来る伴侶を手に入れた役者は、間違いなく、名優になれるんだ」

「自己と、伴侶——ですか？」

「お前、一人で何が出来る？映画だってみんなで作るもんだ。人生だってそうだ。上辺だけのオンナのつきあいばかりじゃ、オンナのよさなんてわかりやしない。支えてくれるよき伴侶がない俳優は、傾いた家と同じさ。すぐに倒れる」

監督は言った。

「はやく男として一人前になれ。嬢ちゃんがダメでも、それにふさわしいオンナを手に入れるためにも、な」

翌日の午後。

「あれ？」

撮影の合間を見て悠理を探していた宝条が悠理を見つけたのは、撮影現場のすぐ側の木陰だった。

悠理は眠っていた。

考えてみれば。

宝条はその寝顔を見つめながら思った。

美味い料理――

身の回りの世話――

撮影の手伝い――

そして――

どうしよう。

宝条は躊躇した。

監督からはまだ早いといわれたが、それでも気持ちを伝えられないのはイヤだ。

だけど、悠理のこの無邪気な寝顔を起こすのも可哀想だ。

「……」

宝条は無意識に悠理の寝顔に見入っていた。

宝条は気づかない。

自分が段々と悠理に顔を近づけていることを。

そして――。

「好きだよ。悠理」

宝条は、悠理と唇を、重ねた。

●その後 明光学園

「ねえ、水瀬君」

食事を終えた美奈子が、教室に戻ってきた悠理に映画雑誌を手渡しながら言った。

「この映画って、水瀬君が手伝いに行ったヤツたよね？」

「え？」

見ると、確かにそれは悠理が手伝いにいったあの時代劇だ。

「うん。監督からって試写会のタダ券もらっている」

「うそ！ね！見に行こうよお！」と未亜。

「いいよ？5人分あるし」

「やりい！」

「でも、水瀬君」とルシフェル。

「さつき、宝条君から、何か言われいなかった？」

「うん。旅行に行こうって」

「旅行？どこへ？」

「モロッコ」

「はあ？」

宝条瞬主演の映画は、そのクライマックスシーン、絶望と自暴自棄に陥った瞬演じる侍の、死を恐れない暴走ぶりの迫力と、それを文字通り演じきった宝条の演技力に高い評価が集まり、口コミが口コミを呼ぶ形で大ヒットしたという。

ただ――

「宝条君は」

完成試写会で進行役が宝条に訊ねた。

「スタッフの間では有名みたいですが」

「何です？」

「宝条君、この撮影中にかなり手痛い失恋をされたそうではないっ！」

ファンからは悲鳴のような声上がる。

「は、はい……実は」

宝条が泣き笑いに近い顔で頷くと、その騒ぎは大きくなるばかりだった。

「誰よ！？俊様フルなんてマネしたの！」

「信じられない！」という感じだ。

「まあ、あれだけの女性に出会ったのが、何年先になるか、それとも永遠にこないのかわかりませんが、次に出会ったときは、もっと男、いえ。人間を磨いておきたいと思います」

「その失恋が演技に影響は？」

「最後の撮影では十分役立ちました。自暴自棄って言葉の意味、実感しましたし……」

ちなみに、宝条瞬は、この後、浮いた噂がなくなり、かなり硬派な俳優として芸能界に確固たる地位を築きあげることになる。

そして――

「宝条君？」

楽屋に入ってきた宝条は、何かを思い詰めた顔をしていた。

「ど、どうしたの？」

「綾乃君」

宝条は血走った目で綾乃を見つめてくる。

尋常ではない目の光りに押され、綾乃は無意識に壁際に追いやりられた。

「ほ、宝条君、なっ、何を！？」

貞操の危険を感じた綾乃だったが、宝条の口から出てきた言葉は、意外なモノだった。

「頼む！悠理君と別れてくれ！」

「……はい！？（； ㇏）」

綾乃は耳を疑ったが、宝条が本気なことだけはすぐにわかった。

「性同一性障害とでもなんとでもする！悠理は女の子になるべきなんだ！だから頼む！まず悠理君と別れてくれ！」

あきれかえった顔の綾乃が宝条に訊ねた。

「……本気、ですか？」

どこからどう情報が漏れたのかはわからない。

硬派宝条のイメージが定着する頃。

宝条「ホモ説がとり立たされ、その余波は……」。

「水瀬君！宝条君と幸せにね！」

「性別なんて関係ない！私達、応援するわ！」

「??????」

学校で悠理に声援を送る女子生徒の手には、やおい本やル〇一文庫が握られていたという。

よかったのか悪かったのか……。

恋する資格って？（後書き）

はい。お疲れさまでした。この後、「僕たちの甘くせつないミッシヨン」と「悠理ちゃんの災難」へと続きます。
よかったですら見て下さい！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2977b/>

演技と料理と大失恋

2010年10月10日21時29分発行